

(日置郡松元町大字石谷字前山)

位置と環境

遺跡は松元町と鹿児島市を隔てる台地上にあり、台地の分水嶺から西側に開析する谷に向かう北側緩傾斜面に位置する。基盤層は凝灰角礫岩で、標高は約195mである。調査区は浅い谷を隔てて西にはA地区、東にB地区がある。谷を隔てた北側には杵堀遺跡、東側500mには仁田尾遺跡が所在する。

調査の経緯

調査は南九州西回り自動車道鹿児島道路の建設に伴い、建設省鹿児島国道工事事務所の依頼を受けて県教育委員会が平成7年4月から平成8年9月にかけて実施した。調査面積は、5,000m²である。

遺構と遺物

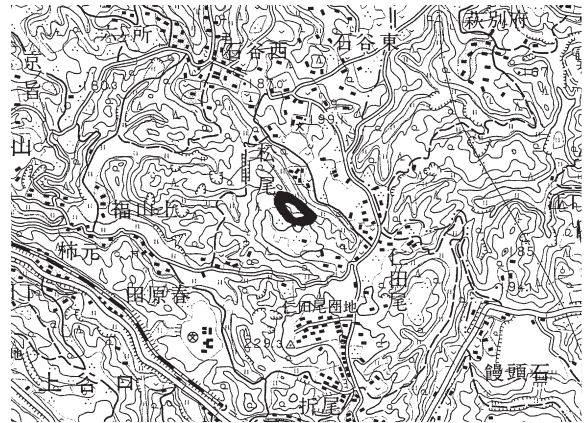
調査では旧石器時代を中心に、縄文時代早期、古墳時代の遺構・遺物が確認されている。

縄文時代早期は塞ノ神式土器等が出土している。古墳時代は成川式土器や、成川式土器の完形品を2個含む土坑等が検出されている。

旧石器時代は、本遺跡の主体をなす時期で、A T下位のナイフ形石器文化期から細石刃文化期までの5つの文化層が確認された。層位は薩摩火山灰層をVI層としてその下に通称”チョコ層”と呼ばれるVIIa層、VIIb層、その下にA Tの風成再堆積土壌のVIII層、その下に凝灰角礫岩の風化土壌であるIX層が堆積しており、それぞれが遺物を包含する地層となっている。

IX層の石器群はA T下位のナイフ形石器文化期に属するもので、A地区のみに確認されている。遺構はブロック数か所が確認されており、遺物は台形石器、ナイフ形石器約10点を含む総数500点出土している。年代は約30,000年～24,000年前の間が考えられているが、現在のところ明らかでない。

VIII層の石器群はA B両地区で確認されている。遺構はブロック10数か所、礫群2基が検出され、遺物は総数15,000点が出土している。石器群は剥片尖頭器、三稜尖頭器それぞれ約30点を始め両面加工の尖頭器、台形石器、ナイフ形石器等が多数出土し、豊富な器種組成を示している。ナイフ形石器の中には瀬戸内地域との関連が考えられる国府型ナイフ形石器も含まれる。礫群中に含まれる炭化物の¹⁴C年代



第1図 前山遺跡の位置

測定の結果、約22,000年前の石器群であることが判明している。

VIIb層の石器群はB地区のみで総数40点確認されている。遺構はブロック1か所で、遺物は2～4cm程度の小型の三稜尖頭器のみ10数点である。

VIIb～VIIa層にかけての石器群はB地区のみで総数1,000点確認されている。遺構はブロック、礫群等が検出され、遺物は小型のナイフ形石器、台形石器、折断剥片などが多数出土している。

VIIa層の石器群はA B両地区で総数5,000点確認されている。遺構はブロック数か所、礫群が検出されている。遺物は細石刃核、細石刃などである。少量ではあるが、石鏃も出土している。

特徴

シラスの厚く堆積している県本土ではシラス下位より石器を検出する例は少ない。本遺跡は、立地的条件により数少ないシラス下位の石器群を検出し、資料を提供することが出来たという意味で貴重である。また、県内各地で単独に出土していた石器群が同一遺跡内において層位的に捉えることが出来た。本県の該期の編年的研究において、その果たす役割は大きい。

資料の所在

出土遺物は、鹿児島県立埋蔵文化財センターに保管されている。

調査区は現在の松元 IC 料金所付近である。

参考文献

鶴田静彦・桑波田武志1997「A T下位から細石刃文化期までの複合遺跡」『旧石器考古学』55

(桑波田武志)

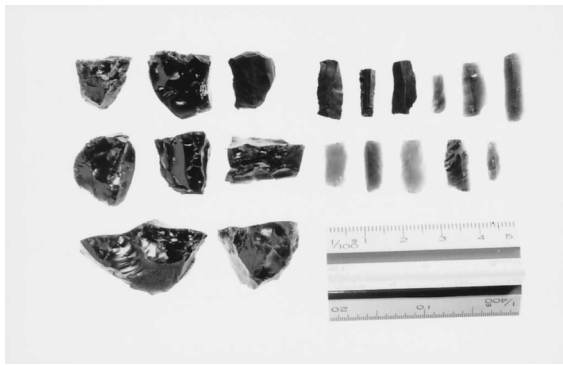


写真1 VIIa 層の石器群

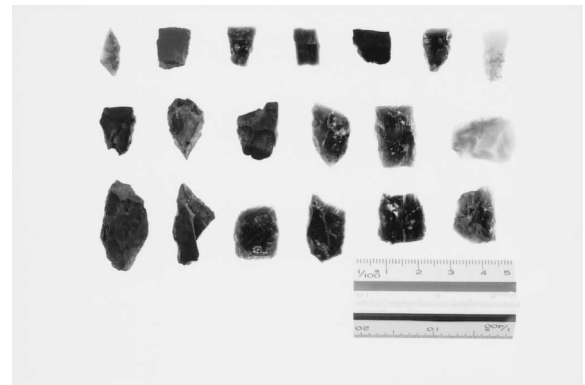


写真2 VIIa～VIIb 層の石器群

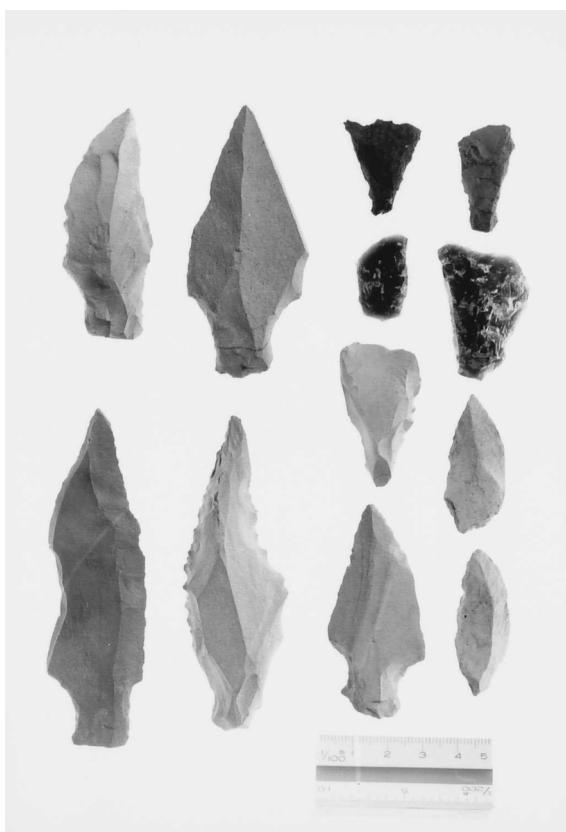


写真3 VIII層の石器群



写真4 VIII層の石器群

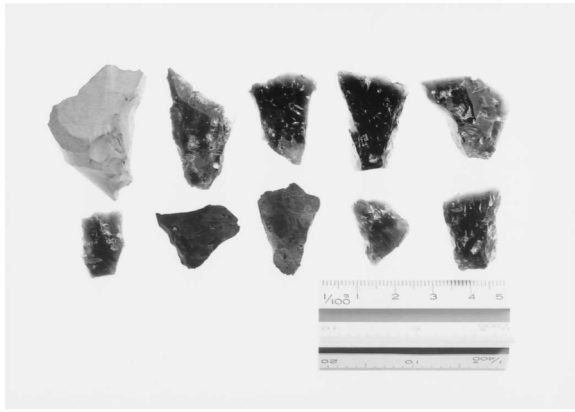


写真5 IV層の石器群

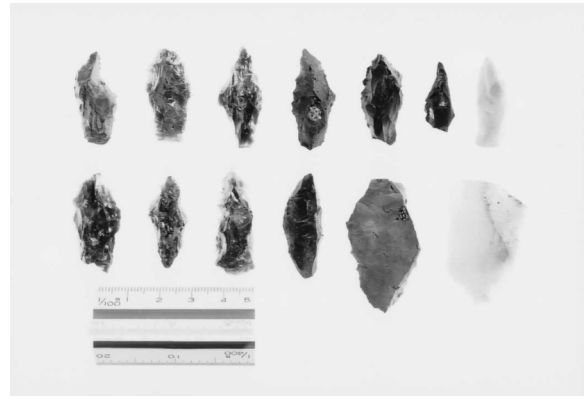


写真6 VIIb層の石器群

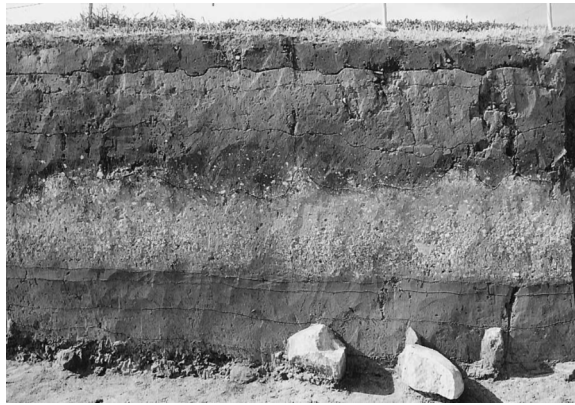


写真7 土層



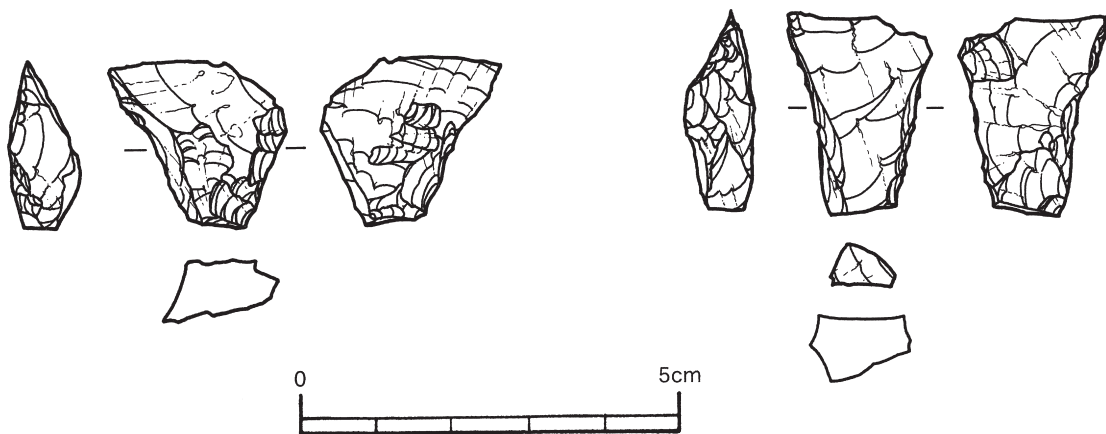
写真8 VIIa層遺物出土状況



写真9 VIII層の礫群



写真10 完掘状況



第2図 IV層出土の石器